

「ドナウ・サンセットクルーズ」の思い出

～日本オーストリア修好120周年記念～

鈴木一彦：元 ジャルパック オーストリア社長

当時のウィーンに於ける日本人社会は、多くの日本企業が進出を果たし、日本人学校生徒数も125名になり、シヴァリングの旧校舎からドナウの対岸へ引越し準備に追われている時代でございました。従いましてオーストリアの方々との交流も、経済、文化のみならず広い範囲に及んでいた中で、修好120周年を迎えたこととなります。そのような中で日本人会としてどのような記念行事をしたら良いかと、真剣に検討を加えた結果「修好120周年記念ドナウ・サンセットクルーズ」が決められました。当然のように話は大きく展開して、オーストリアの方とも一緒にすることになり、オーストリア日本協会と共同で開催されることになりました。オーストリア側も日本人観光客の積極的誘致を始めており、過分な協力をいただきました。

小生は役職柄、さっそく船会社（DDSG ドナウ蒸気船運行会社）と交渉を始め数日後に、600人乗りで最大のウィーン丸での可能性（条件付）を頂き、準備は佳境に入っていました。その条件とは、

- 1、 ドナウは国際航路であり、税関の承認が必要。（国際船との接触は禁止）
船橋に掲げる国旗の位置など規定に従うこと。（最前部最後部は不可）
- 2、 当時は水位が例年より少なく大型船では、航路、運行速度、目的地が変更される可能性があること。
- 3、 運行時間が夕方なので、照明のある指定された波止場での上下船。

また日本人会側からは、いずれも友好のためであるので、格安でお願いするなど数回の交渉を重ね、水位問題を除き全てが解決しました。

運行コースは ウィーンを出航して上流に向かいグライフェンシュタインにある水位調整ダムを通過して、Uターン後ウィーンに戻る事に決まりました。

この頃はドナウの水位が例年に無く低く、小生は毎日水位を調べ、一喜一憂した覚えがあります。

後は船内外のアトラクションと装飾関係です。

出航時に100年前と同じ騎兵隊吹奏楽団による演奏とファンファーレ・銅鑼、船外は左舷に日本オーストリア友好の船の横断幕と中央マストに日の丸を掲げることになりました。

船の飲食はスポンサーを募り日本とオーストリアの名物を提供することになり、アトラクションは同じく双方の文化の紹介をすることになりました。

- ・すしバーの開設
- ・名物ワインとビールのスタンド
- ・おにぎりの炊き出し
- ・クラシック音楽の演奏と踊り
- ・ウィーン音楽（シュランメル）
- ・日本人小学校による人形芝居
- ・詩吟
- ・全員参加による盆踊り

また、乗船人数 600 名は瞬く間に埋まり、その名簿は双方著名な方々のお名前が並びました。

さて当日、時は 1989 年 9 月 30 日です。(乗船：14 時 30 分、出航：15 時)

朝から雲が広がり、ドナウの水位もあまり変わらずで、一安心して港に着くと、すでに大きな日の丸を掲げたウイーン丸が接岸され、ご提供いただいた品物が船内に運びこまれています。参加者も三々五々集まられ、乗船をお待ちになっています。

「今の山国オーストリアで一番大きな船の出帆だよ」オーストリア人がつぶやきました。我々、海に接して育った日本人には何か遠い望郷の念を感じます。

吹奏楽隊の奏でる在りし日の「オーストリア海軍のマーチ」に送られて、「ウイーン」は、大きな外輪を静かに回し始め出航しました。ウイーンの森、カーレンベルクとクロスタ



乗船中のウイーン 丸

ーノイブルクを左に見ながら、川は左に旋回して西に向かいます。天気良ければここでサンセットを迎えるところですが、生憎の曇り空です。でも元気な子供達は、後部甲板ではしゃいで遊んでいます。船内ロビーではウイーンフィルメンバー有志による「青きドナウ」ワルツが演奏され、雰囲気盛り上げていました。すしバーは大盛況で永い行列が出来、おいしいワインをたしなみながら、左手にグラフェンシュタイン城が見えてくると、水位調整のダムです。このダムは上流と下流の水位が違うので、二つの水門を使い船をこの水門の間に入れて、一方を閉じ水を出し入れすることにより調整する珍しいものです。子供たちの社会勉強にはもってこいの見学です。

ここで、出張から戻られた長谷川大使ご夫妻にご乗船頂き、船内は益々その盛況を増していきました。和服姿のご婦人方の指導により、盆踊りが終わるころには、岸の明りも灯り始め船は予定通りの 4 時間の行程を終え、夕闇せまる港に無事帰港いたしました。

オーストリアと日本、120 年の歩みの中で双方が一つになり、ドナウの川面で楽しく遊んだ、歴史に残るひと時ではなかったかと、今でも思い出として大事にしてゆきたいと思っています。さらに、来年は 140 周年記念を迎えることとなりますので、オーストリア側でも日本側でも交流の記念事業が一層大きな輪になって展開されることを祈念いたします。私は、日本側でスキー渡来 100 周年記念事業に企画・参加し、交流促進の一翼を担う予定です。

鈴木一彦：元 ジャルパック オーストリア社長 (1985.4~1994.3)

JAL を退職後、現在、 (株)日本リフトサービス 代表取締役
石打丸山索道事業共同組合 理事長